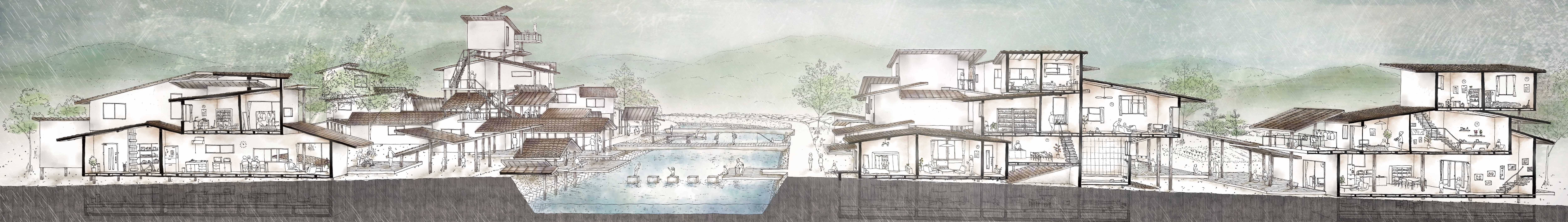
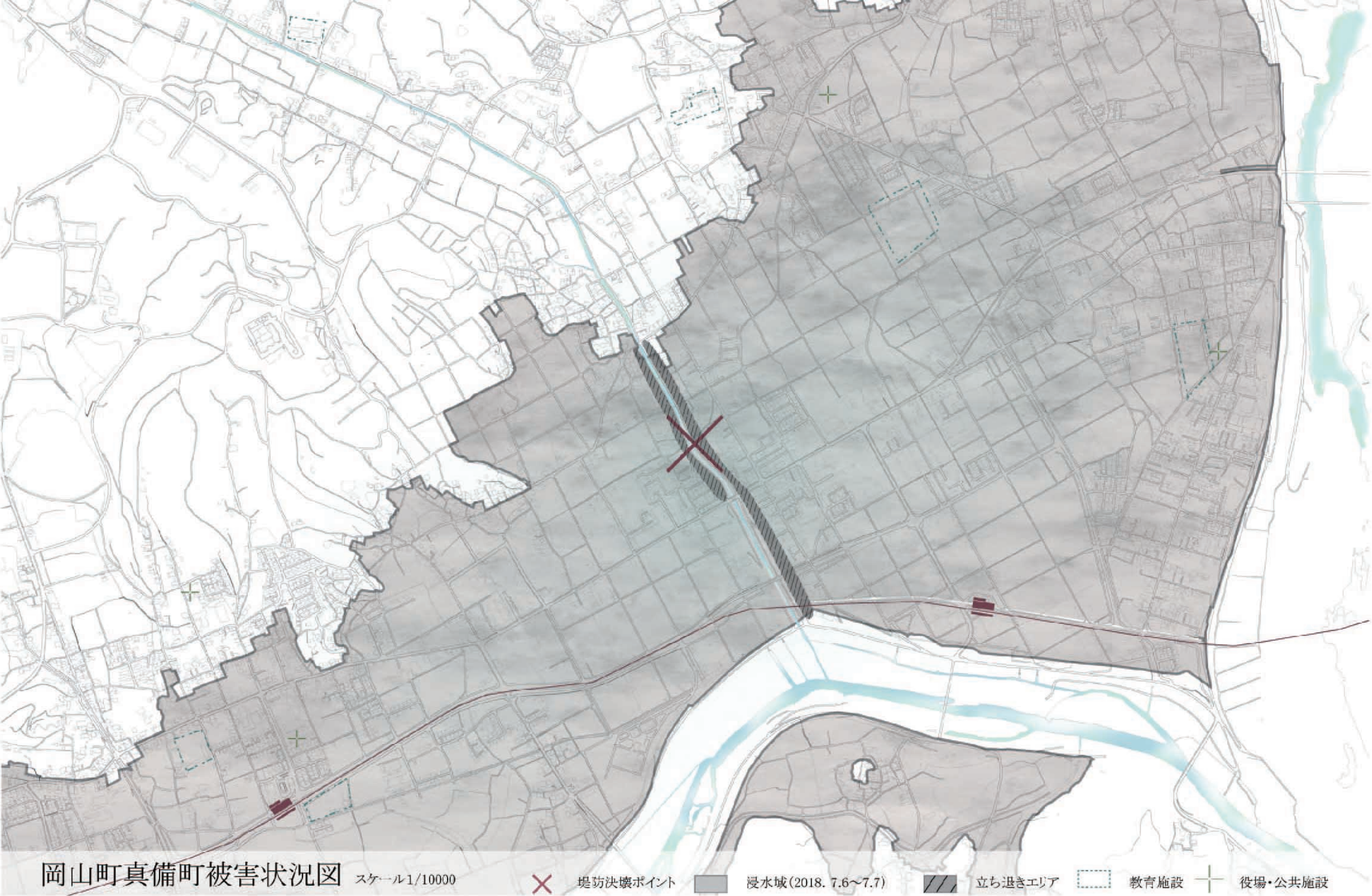


雨跡を編む





## 00 西日本豪雨 Site:真備町有井地区



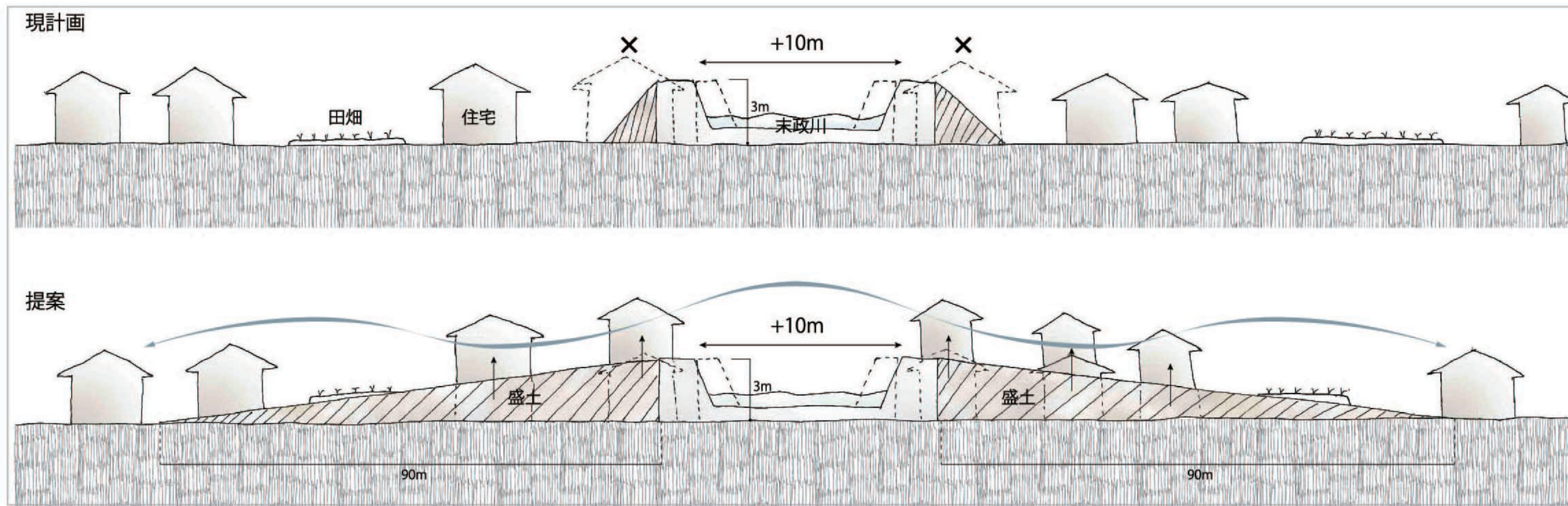
2018.07.06 - 07.07  
岡山県真備町は西日本豪雨により甚大な被害を受けた。有井地区では小田川の支流である末政川の堤防が越水により決壊し、多くの住宅が浸水により住むことができなくなった。被災後、仮復旧の工事が行われ、現在堤防の強化のため全長1kmに渡る拡張工事が計画されている。末政川の堤防は1kmに渡り、およそ10m幅を拡張することが計画されているが、このために堤防沿いの住宅120軒、200名の立ち退きが必要となる。立ち退き対象とされた住民はこれまでの思いの詰まった家、土地、地域に住むことができなくなり、現在は仮設住宅で生活しているがそれも2年が期限とされている。

## 01 土木的手法



現在計画されている堤防拡張工事は、堤防の幅を10m広げ、強固な「壁」として住宅地から川を隔離するものである。壁としての堤防は町の風景、空気感、人々の繋がりを分断してしまう。そこで堤防の**上端から大地までを盛土し緩やかなスロープ**にすることで、川の兩岸の町が分断されることなく、無機質な堤防に生活の色が広がる。

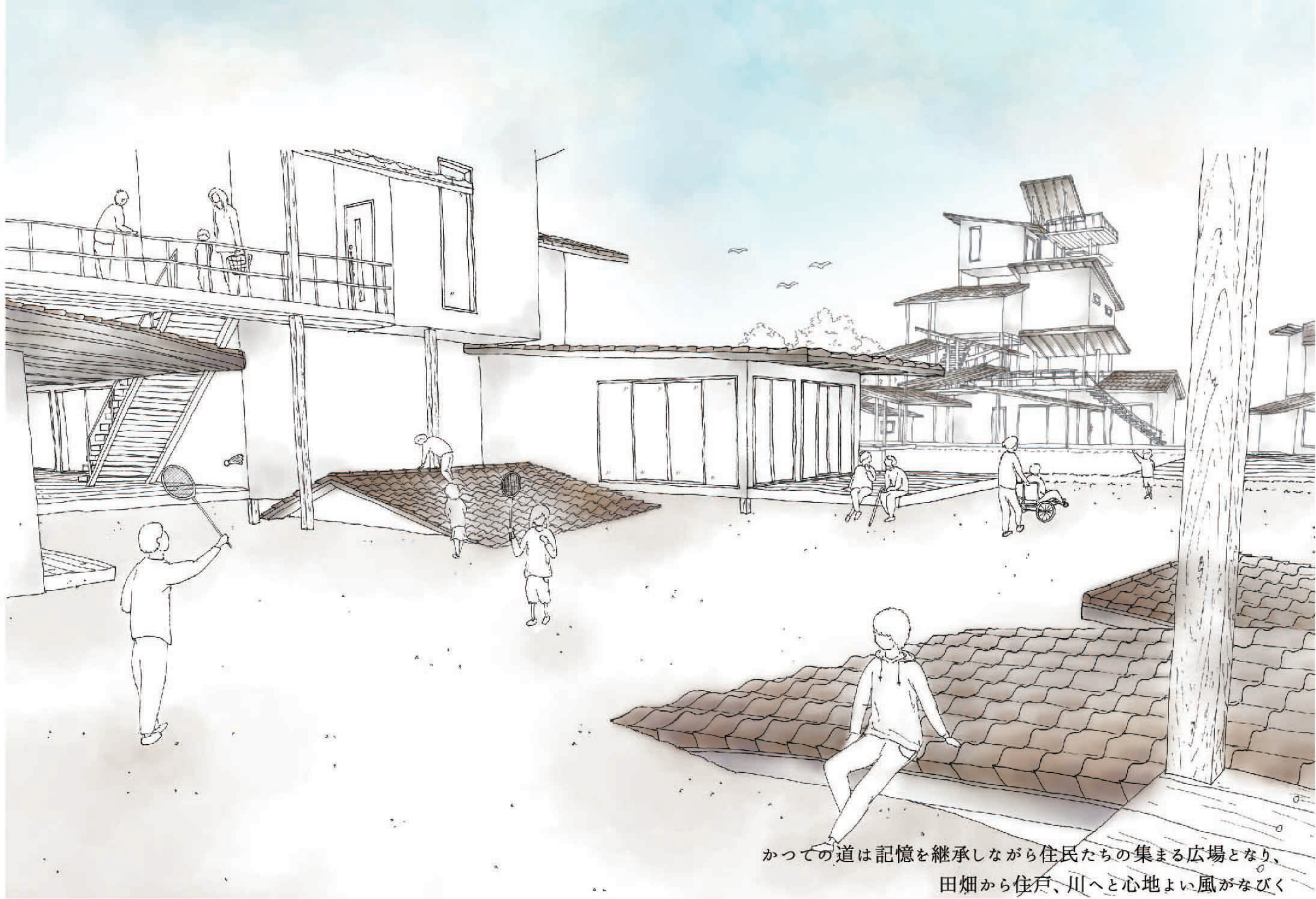
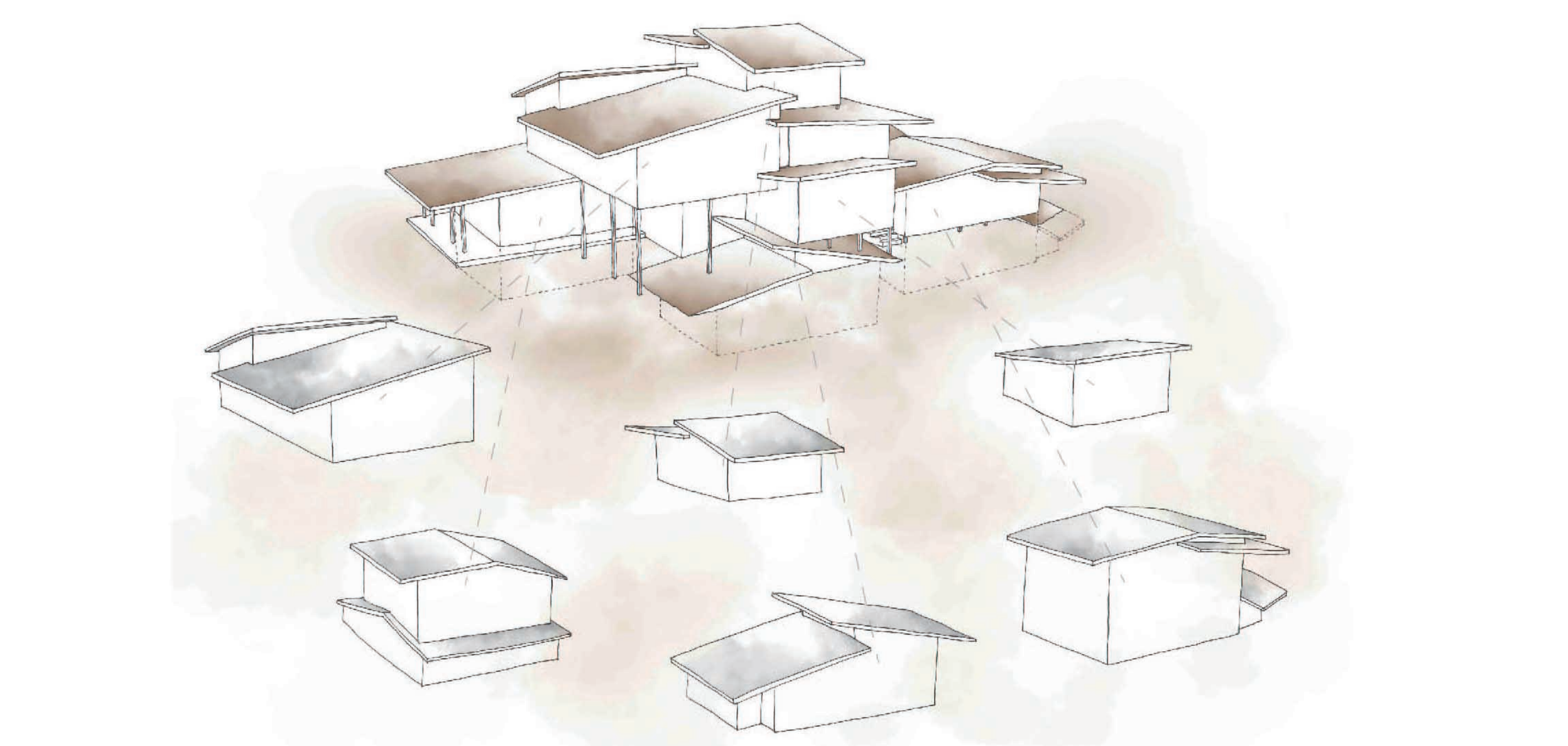
真備町での堤防決壊の原因はほとんどが越水であるが、高規格堤防と呼ばれるこの形状では今回以上の大雨や地震に見舞われても決壊する可能性が下がり、壊滅的な被害を避けることができる。



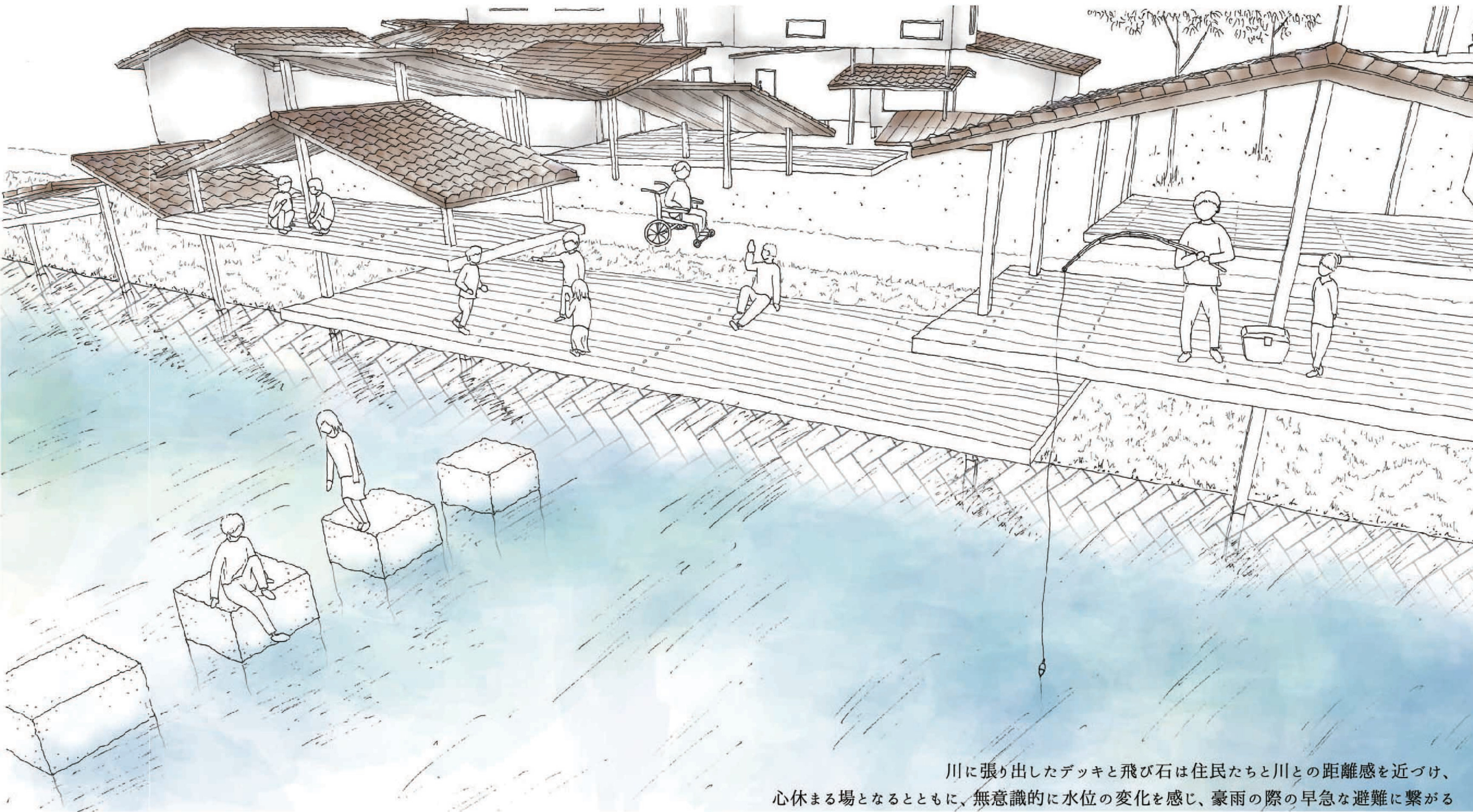
## 02 建築的手法

被災した土地を更地にし新たな住宅群を形成するのではなく、**既存の住宅のボリュームや柱割をトレス**し、かつての生活の上にこれからの生活が築かれていく。壊滅的な被害を受けた1階部分は盛土で地中に埋まるが、2階以上の層が表出し、残された柱や壁、屋根を中心に生活の空間を再構築する。

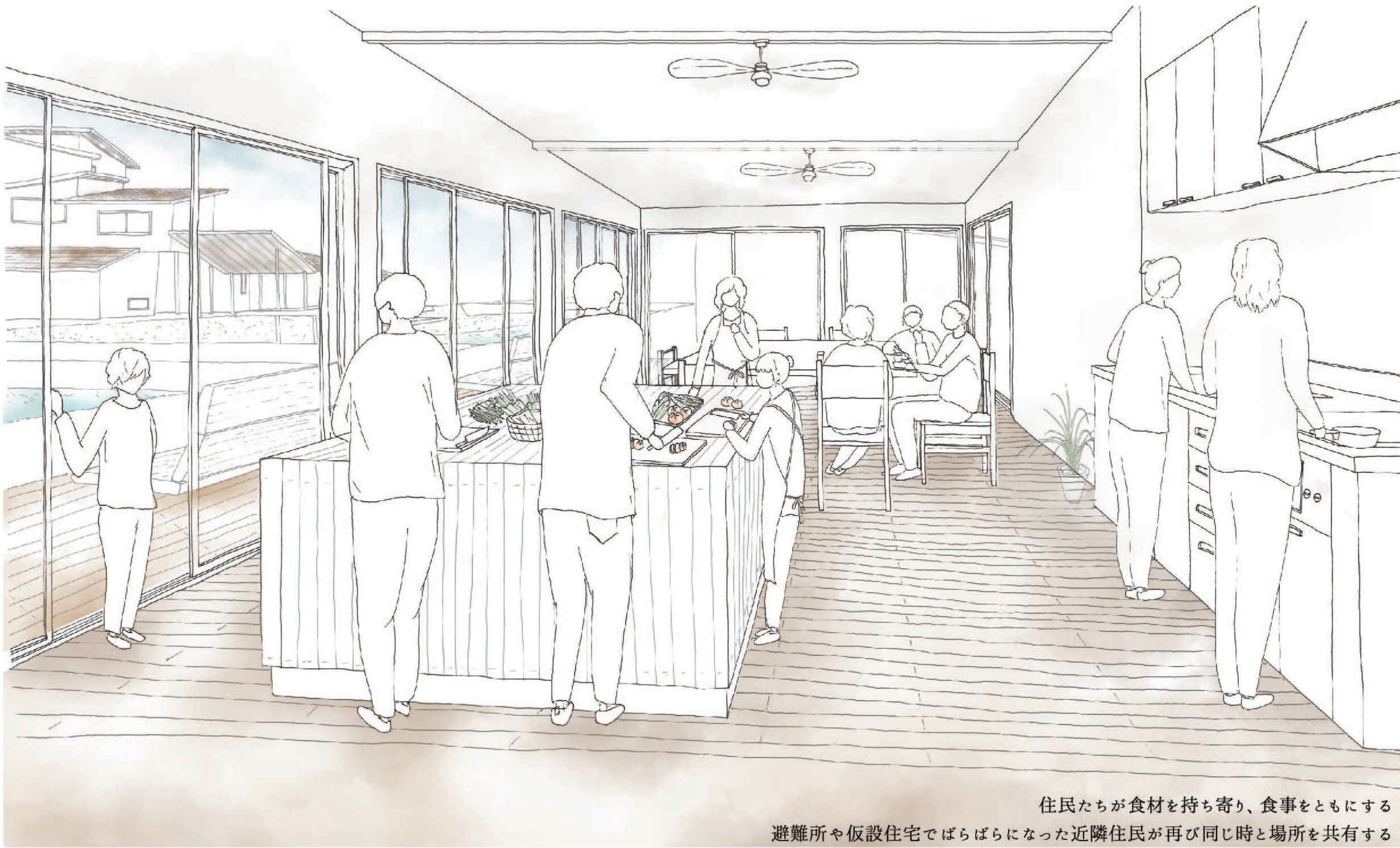
既存棟の2階部分が新たな1階部分となり、それを核として被害の少ない室や柱、瓦を補強や増築を施しながら組み合わせ、**過去の記憶を継承した暮らしの場**を創出する。



かつての道は記憶を継承しながら住民たちの集まる広場となり、田畑から住宅、川へと心地よい風が吹き、



川に張り出したデッキと飛び石は住民たちと川との距離感を近づけ、心休まる場となるとともに、無意識的に水位の変化を感じ、豪雨の際の早急な避難に繋がる



住民たちが食材を持ち寄り、食事をともにする避難所や仮設住宅でばらばらになった近隣住民が再び同じ場所を共有する

